

地域の歴史と文化を次世代につなぐ

⑥下北ふるさと活性協議会/NPO 法人斗南どんどこ健康村【むつ市】

今日的課題・地域課題

- 教育事業と地元の資源開発を通じた地域振興。
- 下北の歴史・文化を次世代に伝えるシニア世代の地域活動。

施設・団体の目的、経緯

むつグランドホテル社長の熱意と厚意で、下北の文化、歴史を展示する「斗南どんどこ村」がホテル裏の広大な敷地内に造られました。その後、平成18年に下北の有形・無形の文化的資産の保存・伝承や、資源の研究・開発の事業を通して、明るく活力ある地域社会の創造に寄与することを目的に、NPO法人斗南どんどこ健康村が設立されました。メンバーは現在39人で、全メンバーが集まる会議は年4回、普段はシニア世代で時間に余裕のある中心メンバーが連絡を取り合って活動しています。

メンバーの年会費5千円と関係者からの寄付が活動資金ですが、他に行政の事業委託や、各種の助成金も積極的に活用し、幅広く活動しています。民間の経済界や行政機関にパイプのある事務局が組織を運営し、実際の活動は奈良理事長をはじめ元教員など専門性のあるメンバーがおこなうため、安定した活動ができています。

法人の主な活動は、斗南どんどこ健康村の施設運営と、子どもたちの体験活動の実施、下北地域の文化的資産の保存活動、地域資源を生かした商品開発等に取り組んでいます。拠点となる斗南どんどこ健康村の施設は、下北郷土資料館をはじめ様々な展示施設や体験施設があり、来場者は自由に見学することができます。また、学校の校外学習などの団体予約が入った時には、メンバーがついて展示物の説明をしたり、裂織やヒバ細工などの体験活動をすることができます。



どんどこ健康村 入口

そして、地域資源の掘り起こしと開発にさらに力を入れるため、NPO法人斗南どんどこ健康村を中心に、より広域で様々な職種のメンバーが参加して発足したのが下北ふるさと活性協議会です。協議会は、むつ市や東通村の行政関係者、民間企業関係者、農業組合や漁業組合、商工会等の各種団体関係者が広く参加・協力し、地域の子どもの育成やグリーンツーリズムに取り組む子ども農山漁村交流プロジェクト部会と、地域活性化の研修会等を開いたり下北の特産品を利用した新商品の開発・販売に取り組む農産物加工品部会に分かれて活動しています。



健康村内の展示(田名部祭山車)

農山漁村地域力発掘支援モデル事業、あおもり食産業連携プロジェクト、子ども農山漁村交流プロジェクト、第28回地域づくり団体全国研修交流会青森大会下北地区担当など、行政等の事業に積極的にに関わり、確かな成果をあげています。

特長的な活動・工夫等

【地引網体験モニターツアー日程】

- 8:30 小学校出発（貸し切りバス）
- 9:20 東通村岩屋地区海岸着、開村式、オリエンテーション
- 9:30 地引網体験
- 10:40 岩屋地区海岸出発
- 10:50 尻屋岬灯台到着、奈良 NPO 理事長による下北の自然、文化、歴史の講義
- 11:40 尻屋岬出発
- 12:30 小学校到着、終了

今回、総務省、文部科学省、農林水産省の連携事業である「子ども農山漁村交流プロジェクト」の「第二田名部小学校地引網体験モニターツアー」を訪問しました。運営する側は、斗南どんどこ健康村のメンバーが10名、他に下北ふるさと活性協議会の会員でもある角本漁業組合から6名が協力し、5年生95名、教員6名、保護者8名の参加で実施されました。前日海が荒れたこともあり、あまり多くの魚を採ることはできませんでしたが、子どもたちは初めての地引き網体験を通して、下北の自然や海、歴史や文化について学ぶ貴重な体験をすることができました。

下北ふるさと活性協議会では、学校側の負担を極力なくした豊富な体験活動プログラムメニューの一覧を下北地区の全小学校に送付して参加校を募りました。その結果応募が殺到し、かなり多くの学校に断りを入れることになったそうです。子どもたちの自然体験、漁業や農業などの職業体験、地元の専門家による地域の歴史や文化の講義は、貴重な学習機会として学校側のニーズが高く、今後もより多くの学習機会の提供が期待されます。



第二田名部小学校「地引網体験」



尻屋岬灯台で下北の歴史と自然を学習



今後の展望、課題等

- 体験活動に対する学校側のニーズが高いため、多くの体験メニューを準備、開発するように工夫しています。
- 下北地区の活性化のため、成功している地域を参考にして修学旅行生の受け入れなどのグリーンツーリズムと、下北の特産品を利用した新商品の開発・販売を成功させたいと考えています。
- 若いメンバーを育て、活動を広げ長く継続していくことが今後の課題ということです。

取組のポイント・ヒント

- ◇事務担当と実事業担当、子どもの体験活動担当と地域資源の開発担当、というように、効率的な役割分担がなされ、行政や民間企業、各種団体との連携も円滑になされています。
- ◇地域の自然や文化の保全・伝承については、元教員等の専門的な知識と情熱を有するシニア世代が活躍しています。

- 訪問日
平成23年9月1日
- 訪問委員
関智子、小山内世喜子、小鳥孝之
- 対応者
NPO 法人斗南どんどこ健康村 奈良正義 理事長、甲田紀儀 事務局長ほか役員3名

NPO 法人どんどこ健康村の概要掲載HP

<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/cgi-bin/profile/data.cgi?number=5740>

年間を通じた農業体験・食文化体験

⑦三戸食農推進協議会「さんのへ農業小学校」【三戸町】

今日的課題・地域課題

- 地域の基幹産業である農業と、地域の食文化を次世代に伝える。
- 勤労体験、自然体験による青少年育成。

施設・団体の目的、経緯

「さんのへ農業小学校」は、県の三八地域県民局が三戸町と協力し、平成23年度から2カ年の事業である食農推進モデル事業で実施しているものです。次代を担う子どもたちが、農業体験・自然体験を通じて、たくましい精神力と創造力を身に付け、「食」や「農業」への理解を深めることを目的に実施しています。また、同時に子どもたちの指導者として地域の農業関係者やボランティアが協力することで、地域農業の活性化と地域コミュニティの強化を図ることも目指しています。

「さんのへ農業小学校」は、平成20年度末に閉校になった旧三戸北小学校を会場に、地域の協力農家の田畑等も使いながら、子どもたちが1年間を通して農業と食について学ぶものです。授業料（参加費）は年間一人三千元で、1カ月に約2回のペースで年20回の農業体験・授業が予定されています。

実施主体は三戸食農推進協議会で、会長である三戸町教育委員長が校長を務め、副会長（当該地域の町内会長）が教頭を務めています。指導する先生（農家先生）は地元農家の方や社会教育委員、認定農業者の方々6名で、事務局は三戸町中央公民館が担っています。

平成23年度は三戸町のほか三八地区の小中学校で広く参加者を募集したところ27人の参加者があり、平成23年4月16日に入学式を実施後、稲作や畑作のほか、収穫した作物の加工や販売まで、本格的な農業体験に1年間を通じて取り組み、

平成24年2月25日に卒業式を行いました。

参加児童の内訳は三戸町内から20人、八戸市や周辺町村から7人で、学年は小学校1、2年生が半数を占め、3年生から6年生は3、4人ずつの参加でした。

平成24年度は、平成23年度に引き続いての参加であるリピーター11人を含む23人が入学し、地域のプロの指導のもと、農業体験に取り組んでいます。

年間を通じたカリキュラムで、自然体験・勤労体験による心身ともに健康な子どもたちの育成と、職業体験による子どもたちの職業観の育成、地域の大人との交流による故郷の産業・文化への理解と愛着の涵養がなされています。

平成23年度 参加者募集チラシ

米・野菜・果物づくり
植える とる いただく

4月16日～2月25日（全20回）
月2回・土曜 午前9時～正午

先着30人

【申込み・問い合わせ】三戸町中央公民館内「さんのへ農業小学校」 ☎ 022-2786 FAX: 23-4766

【申込み先】三戸町中央公民館 「さんのへ農業小学校」入学申込書

お名前	参加者氏名	電話番号
住所	学校名・学年	保護者氏名

特長的な活動・工夫等

農業等の専門機関である三八県民局地域農林水産部と、教育の専門機関である三戸町教育委員会が協働することで、非常に専門的でよく考えられた効果の高い職業体験・自然体験がなされています。畑作、稲作、果樹栽培などの直接の農作業体験から、市場や農家の職場見学、収穫物の加工・調理の体験、農林水産まつりにおける販売体験など、職業・文化・食・環境・地域などを総合的に学ぶことができる質の高いカリキュラムが組まれています。また、入学式や卒業式の節目の行事、夏休み中の宿泊体験学習も、子どもたちに刺激と喜びを与えるアクセントになっています。

訪問した時は、リンゴ畑で葉を取る作業に取り組んでいました。参加者は学年が均等になるように班分けされていて、上級生が1・2年生の面倒を見ながら、りんごの木の葉を取る作業に取り組んでいました。さんのへ農業小学校関係者や指導する農家先生のほか、子どもたちの保護者も一緒に参加しており、4月から継続した活動であるため皆仲良く、大人も子供も和気あいあいとした雰囲気に取り組んでいました。

農業小学校の道尻校長をはじめ運営スタッフは、「生きる上で一番大切なことは食で、それを担う農業の重要性を子どもたちにしっかりと伝えたい。農業にかかわる活動は人として生きていくための大切な力が養われる。この体験は必ず将来役に立つと信じている」という確かな信念と情熱をもって運営しています。



りんごについての学習



葉の取り方を聞き、作業へ

今後の展望、課題等

○職業観の育成を考えると高学年の子にも多く参加してほしいのですが、部活等で忙しく難しいのが現状です。また、1年を通して送迎等で協力する保護者は意識も高く熱心ですが、それができない家庭の子どもたちにどのようにアプローチしていくかが難しい課題です。

○知事が訪れたり、マスコミが取り上げることもあって、地域ではかなり認知されています。

○今後は、近隣の中学生や農業高校生徒との連携・協働等が重要になってきます。また、2年間の県の事業であるため、事業終了後も地域として継続していけるのかが、課題です。

取組のポイント・ヒント

◇県行政と町の教育行政が連携・協働し、質の高い職業教育・自然体験学習が実施されています。

◇地域の職業人による教育支援活動・キャリア教育の実施が、子どもたちの育成と、地域活性化・コミュニティづくりの両面で大きな効果を発揮する好例です。

○訪問日

平成23年9月17日

○訪問委員

秋庭隆貢、浅田豊

佐々木秀智

○対応者

三戸町教育委員会 道尻増治
委員長(三戸食農推進協議会
長)、三戸町中央公民館職員

問合せ先 事務局 (三戸町中央公民館) TEL 0179-22-2186

科学教育にとどまらない多様な教育支援活動

⑧青森県立三沢航空科学館／NPO 法人テイクオフみさわ【三沢市】

今日的課題・地域課題

- 地域ぐるみで子どもを育む教育支援プラットフォームの中核を担う。
- 教育施設にとどまらず、地域活性化・地域連帯の拠点となるべく事業を展開。

施設・団体の目的、経緯

三沢航空科学館は、青森県にかかわりのある航空機及び航空の歴史を紹介し、科学に関する知識を普及することによって青少年が科学に対する理解と関心を深めることを目的に、平成15年8月8日に開館した県の公共施設です。

当初は財団法人青い森みらい創造財団が運営していましたが、平成18年度から「テイクオフみさわグループ」が指定管理者となり、運営しています。テイクオフみさわグループは、NPO法人テイクオフみさわ、育栄管材株式会社、株式会社乃村工藝社、財団法人日本科学技術振興財団で構成され、それぞれが持つ施設管理や博物館経営、事業推進のノウハウを生かして、多様な企画や事業を打ち出した運営がなされています。

開館時間は9:00～17:00（月曜休館）、入館料は一般500円、高校生300円、中学生以下は無料で、常設の展示物やアトラクションのほか、科学実験工房での多彩な科学体験教室、週末や季節ごとの多様な企画イベントなど、科学に触れながら誰でも楽しめる魅力ある施設として、多くの来館者でにぎわっています。



三沢航空科学館 外観

非常勤も含めたスタッフは48名で、管理・企画機能を担う総務企画グループ、事業推進機能を担う渉外広報グループ、教育交流グループ、地域連携グループと組織化され、各グループ間での共通理解を図りながら様々な事業を展開しています。事業運営は県からの指定管理料と入館料のほか、自治体や財団等の助成金、営利部門（ミュージアムショップ、飲食物提供、特別展等）での収益などを効果的に活用しながら、より効果と魅力のあるプログラムになるよう、工夫しています。そして、共同企業体、県、市、財務アドバイザー等による運営協議会を年4回開催し、また地元関係者との経営管理会議を年2回開催するなど、客観的な評価と意見を取り入れながら、常にサービスと魅力向上に努めています。

テイクオフみさわは、世界で初めて太平洋無着陸横断飛行に成功したミス・ビードル号の出発地が三沢市であったことから、約25年前に三沢市商工会の若手を中心にミス・ビードル号で町興し



ミス・ビードル号のモニュメント

に取り組んだのが始まりです。その後、ミス・ビードルカップ実行委員会となり、紙飛行機大会や小学校での紙飛行機教室の実施、ミス・ビードル号の着陸地であるアメリカのウェナッチ市との交流など、着実に活動の幅を広げていきました。そして、三沢航空科学館と連携・協力しながら、より一層飛行機と科学を中心としたソフト事業を充実させるため、平成15年にNPO法人となりました。

特長的な活動・工夫等

青少年にとって、体験や実験を経ながら科学的な物の見方や考え方を学ぶことは、挑戦し夢を形にしていく生きる力にもつながること、また、地域ぐるみで子どもたちの育成に取り組み、地域の文化や伝統を受け継いでいくことが地域発展につながることに、この二つの理念を中心に据えて、三沢航空科学館は科学体験施設にとどまらず、地域の教育支援活動と住民交流・地域活性化の中心的役割を担っています。

県の科学教育機関として、県内の小中学校に出向いて科学実験教室等を行うアウトリーチ活動を積極的に行うほか、地域の様々なイベント等と連携した事業を展開したり、地域課題に取り組む各種研修会を開催したりしています。

訪問日は、NPO法人テイクオフみさわが主催するコミュニティスクールフォーラム「学校・家庭・地域社会の連携とは何か」が開催されていました。宇宙少年団活動等でのつながりのあるJAXA（宇宙航空研究開発機構）名誉教授的川泰宣氏の講演や、コミュニティスクールに関わるワークショップを通して、地域の力で子どもたちを育むことの重要性について、研修・啓発が行われていました。

コミュニティスクールフォーラムの様子



三沢航空科学館は、県教育委員会の教育支援プラットフォーム事業の上北地区拠点として、企業やNPO法人が持つ教育資源と学校等のニーズをコーディネートする役割も担っています。例えば、平成23年度は三沢市内の小学校の要望を受けて、三沢市社会福祉協議会と学校をつなぎ、「高齢者疑似体験」の体験授業を実施するなど、地域の教育支援活動推進の重要な拠点施設となっています。

今後の展望、課題等

○今後も航空科学館でのイベントや活動を通じて、青少年育成と地域の活性化・地域づくりにつながる取組を展開していきたいと考えています。

○NPO法人としても指定管理者としても、漫然とした経営者や公務員の感覚に陥らないよう、設立時の理念を忘れず熱意と創意工夫を持って企画・運営するよう心掛けたい、とのことです。

○新しい会員を増やすという考え方ではなく、航空科学館に関わる様々な人々の中から、自然に協力してくれる人が集まる仕組みを作りたいと考えています。

取組のポイント・ヒント

◇子どもたちの育成と地域づくりのぶれない理念を持って、数々の参加型企画や学習プログラムの開発に取り組み、地域住民・民間企業と学校を結ぶ青森県教育支援プラットフォームの上北地区の拠点にもなっています。

◇熱意とノウハウを持つNPO法人を中心とした民間の力で、「新たな公共」として、利用者のニーズに応える質の高い施設運営がなされています。

- 訪問日
平成23年9月18日
- 訪問委員
小山内世喜子、岩本ヤヨエ
- 対応者
太田博之 NPO法人テイク
オフみさわ顧問、平野真理彦
三沢航空科学館副館長 ほか



青森県立三沢航空科学館HP <http://www.kokukagaku.jp/>

NPO法人テイクオフみさわHP <http://takeoff-misawa.net/>

地域の賛同者をつなげ地域ぐるみで子どもを育む

⑨十和田NPO子どもセンター・ハピたの【十和田市】

今日的課題・地域課題

- 様々な主体と連携し、子どもたちに良質の体験活動を提供。
- コミュニティカフェを拠点に地域ぐるみで子どもを育む活動に取り組む。

施設・団体の目的、経緯

十和田NPO子どもセンター・ハピたのは、約30年前に結成された十和田子ども劇場が前身で、子どもや子どもに関わる個人、諸団体に対して、子どもをとりまく環境を充実させる事業を行い、子どもも大人も豊かに育つ地域社会づくりに寄与することを目的に、平成18年にNPO法人となりました。子どもたちに体験活動やおはなし会、紙芝居を提供する事業のほか、十和田市の学童保育の指定管理者やコミュニティカフェ「ハピたのかふえ」の経営、さらに子どもにかかわる大人のための各種研修会開催など、子ども育成を核に多彩な活動に取り組んでいます。

十和田市街のビル4階に事務所と「ハピたのかふえ」を構え、月～土曜日の11:00～18:00に活動しています。年会費5千円の正会員と、年千円の応援隊の賛助金のほか、「ハピたのかふえ」の収益と行政の事業の受託等によって、子どもたちのための多様な活動を行うことができます。専従スタッフは3名ですが、「ハピたのかふえ」ではパートを5人、学童保育でパートを3人雇用し、その他の事業や活動では内容に応じて様々な団体や個人と連携協働しています。

今回、「表現活動研究集会子どもフォーラム in 十和田」と「親子で遊ぼう！忍者参上!!～駒っこランドの巻～」の二つの事業を訪問しましたが、NPO法人「あそび環境 Museum アフタフ・バーバン」や十和田市馬事公苑、その他十和田市内外の子どものにかかわる様々な機関や団体、個人の連携・協力のもとで事業は行われていました。

ハピたのかふえ入口



NPO 法人「あそび環境 Museum アフタフ・バーバン」

…あそびと表現活動を通して子どもたちに良質の体験プログラムを提供する、東京に本拠を置くNPO法人。専従スタッフ9名。約30年前、児童館職員だった北嶋尚志氏と仲間、子どもの教育と遊びの研究会を始めたのが始まり。平成9年にあそび・劇・表現活動センター『アフタフ・バーバン』設立。平成17年NPO法人化。設立以来、これまで全国で二千回以上、講演や表現活動を実践し、好評を博している。



十和田市馬事公苑駒っこランド…十和田市に関わりの深い馬事・農事の文化と歴史を後世に伝え、十和田市の観光振興及び賑わいとふれあいの場を創出することを目的に平成17年に開園。市の直営だったが、平成21年よりNPO法人十和田馬主協会が指定管理者となって運営。開苑時間 8:30～18:00。入苑無料。博物館施設の称徳館は有料(一般300円、高校・大学生100円、中学生以下無料) 乗馬等の体験メニューもあり(有料)。



特長的な活動・工夫等

「表現活動研究集会子どもフォーラム in 十和田」は、十和田 NPO 子どもセンター・ハピたのを中心に十和田市内の様々な子どもにかかわる機関や団体、個人が連携協働した「十和田子どもプロジェクト」と、NPO法人「あそび環境 Museum アフタフ・バーバン」が主催した1泊2日の研修会です。参加費3千円と、「十和田まちなかくつろぎの場創り事業」の委託費も活用して実施されました。参加者は各地の子ども劇場関係者や児童館職員、教職員などで、熊本・神戸・金沢・関東など県外から約40名、県内から約50名が参加しました。アフタフ・バーバンの北嶋尚志代表の基調講演に始まり、全体でのあそび体験や、4つの分科会に分かれてのワークショップなど、体験・演習に重点を置いた充実した内容でした。



子どもフォーラムでの実演

フォーラムの翌日には、十和田市馬事公苑主催、ハピたの企画運営で、アフタフ・バーバンスタッフによる「親子で遊ぼう！忍者参上!!～駒っこランドの巻～」が開催されました。馬事公苑と博物館機能を持つ施設「称徳館」を舞台に、約50組の親子が、忍者に扮して様々な体感型の活動を楽しみました。この企画でも、「ハピたの」がコーディネートした団体の連携協力が生きています。

馬事公苑と「称徳館」は非常に立派な施設ですが、近年は来場者の減少に悩んでいました。そこ

称徳館を舞台に忍者遊び



で博物館としての機能だけでなく、人が集い学んだり活動できる社会教育的な手法や活動を取り入れて施設の活性化を図りたいと考え、「ハピたの」に相談し、事業の実施が決まりました。指定管理者であるNPO法人十和田馬主協会の副理事長が「ハピたの」とのつながりが深かったこと、称徳館館長の理解や馬事公苑スタッフの熱意があったことが、すばらしい活動を生み出すことにつながりました。

今後の展望、課題等

○ハピたの…少人数のスタッフで機動力を高め、必要に応じて他団体や個人とつながる柔軟性を持って積極的な活動を展開しています。好調な「ハピたのかふえ」を中心に、一般市民や農家、高校生などとも新たにつながり、食育や若者の居場所づくりなど活動を広げています。

○馬事公苑…今後も市の理解と馬主協会の援助をもらいながら、積極的に社会教育的な手法や活動を取り入れて、施設の活性化に取り組んでいきたいと考えています。

取組のポイント・ヒント

◇少数精鋭のスタッフが、協力してくれる様々な個人や団体との調整やつなぎ役をすることで、多様な子どもにかかわる活動ができています。

◇子どもたちの健やかな成長は地域全体の願いであり、ぶれずに明確な目標と信念を持った行動が、多くの賛同者や協力者を生み出しています。

○訪問日・訪問委員

・平成23年9月23日

丸井英子

・平成23年9月25日

小山内世喜子、岩本ヤヨエ

○対応者

十和田NPO子どもセンターハピたの中沢洋子代表、アフタフバーバン専任スタッフ北崎圭太氏、十和田市馬事公苑中野渡不二男苑長、NPO法人十和田馬主協会中沢乙子副理事長 ほか

十和田 NPO 子どもセンター・ハピたのHP <http://www.hapitano.jp/>

十和田市馬事公苑HP <http://komakkoland.jp/>